

歌詠みの徳

今は昔、大隅の守なる人、国の政をしたため行ひたまふあひだ、郡司のしどけなかりければ、「召しにやりて戒めむ。」と言ひて、先々のやうに、しどけなきことありけるには、罪に任せて、重く軽く戒むることありければ、一度にあらず、たびたびしどけなきことあれば、重く戒めむとて、召すなりけり。

「ここに召して率て参りたり。」と人の申しければ、先々するやうにし伏せて、尻頭にのぼりゐたる人、苔を設けて、打つべき人設けて、先に人二人、引き張りて出で来たるを見れば、頭は、黒髪も混じらず、いと白く、年老いたり。

見るに、打ぜむこといとほしく覚えければ、何ごとにつけてかこれを許さむと思ふに、言付くべきことなし。過ちどもを片端より問ふに、ただ老いを高家にて答へをる。いかにしてこれを許さむと思ひて、「おのれはいみじき盗人かな。歌は詠みてむや。」と言へば、「はかばかしからず候へども、詠み候ひなむ。」と申しければ、「さらば仕れ。」と言はれて、ほどもなく、わななき声にてうち出だす。

年を経て頭の雪はつもれどもしもと見るにぞ身は冷えにけると言ひければ、いみじうあはれがりて、感じて許しけり。

人はいかにも情けはあるべし。

(第一一一 歌詠みて罪を免るること)

【口語訳】

今はもう昔の話だが、大隈の守である人が、国の政をとりしきりなざるところ、郡司がだらしがなかったので、「呼びにやって罰しよう。」  
と言って、前例のように、だらしのないことのあった折には、罪に応じて、（あるいは）重く（あるいは）軽く罰していたが、

（この郡司は）一度ならず、たびたび不始末があるので、重く罰しようとして、呼び出すのであった。「ここに呼び出して連れて参りました。」

と人が言ったので、以前からしているようにうつぶせにして、尻や頭にのっかる人、むちを準備して、むちで打つ役の人を準備して、先に立って二人の人が引っ張って出てきたのを見ると、

頭は、黒髪も混じらず、真っ白で、年を取っていた。

見ると、むちで打つことがふびんに思われたので、何にかこつけてこの男を許そうかと思うものの、口実にできることがない。

過ちなどを片端から聞くと、ただ年老いたことを口実にして答えている。

なんとかしてこの男を許してやろうと思つて、

「おまえはまったくどうしようもないやつだ。歌は詠めるか。」

と言うと、「たいしたことはありませんが、詠みましょう。」

と申したので、「それでは詠め。」と言われて、まもなく、ふるえ声で（歌を）詠みだす。

年を経て……（わたしは年をとつて、頭に雪―白髪―が積もり、今さら霜などには驚かないはずですが、しもとを見るとやっぱり身が冷えてぞっといたします。）

と言つたので、ひどく感心して、心を動かされて許してやった。

人はぜひと風流の心はあるべきである。